

地域医療研修を終えて

愛知厚生連渥美病院

今回私は、新城市民病院での2週間の研修を大きく二つの点に着目して臨んだ。一つは、新城市をはじめとする奥三河地方の地域特性とそれを背景にした病院の役割を知ることであり、もう一つは、これまで研修をしてきた診療科では触れる機会が少なかった総合診療を目の当たりにすることであった。

私は現在三河地方の地域病院で研修を受けている。その研修病院も周囲に総合病院がきわめて少なく、地域の急性期から慢性期にかけての医療を一手に担わなければならないという点では、新城市民病院と共通している。しかし、今回の研修を通して、新城と普段研修を受けている地域では大きく地理特性が異なり、それが医療の雰囲気をも異なったものになっているということを痛感した。新城は多くの山々に囲まれており、近隣の都市とのアクセスが比較的困難である。また、新城市街地とその周辺の集落の間も距離が離れているため、それらの集落から新城市民病院にくることも決して容易ではない。このような地理的困難のなかで、どこまで在宅で対応できるのか、どこから専門科のある他院に紹介するべきなのかという線引きが、単に医学的な背景だけでなく、むしろ社会背景に依存するところが大きいということを実感した。医学的な背景だけに頼って治療方針・目標を設定するという考え方自体が傲慢なもので、同じ身体の状態であっても、人それぞれに方針の立て方は異なって良いのだと考えてもよいのかもしれない。そこに医師だけではなく様々な職種の人々が介在する必要があることは言うまでもない。

総合診療科の外来では、これまで接することの少なかった慢性期の状態の人々の診療に接した。普段救急外来で診察を行うことが多い自分にとって、比較的少人数の患者を、一人一人丁寧に問診・診察して必要な検査や方針を決めることは、同じ外来とはいえ大きなギャップがあり戸惑った。短期的な見方のみ集中した考え方をしてきたがために、ほんの少しの傾聴・身体診察さえ欠落し見落とししてきた部分がかかなりあっただろうと考えてこれまでの診察を反省した。

以上をまとめると、今回の新城での2週間は、研修医として勤務が始まって1年以上経ち業務に慣れる中で省みていなかった医療・診察の大きな別側面を見る良い機会となった。元の勤務地に戻った後、今回感じたことをふまえて診療に当たっていききたい。